

〔研究ノート〕

# 西安碑林博物館と館蔵碑誌装飾文様について

山 本 謙 治

## I はじめに

2006年夏、私は東アジア文様史研究を目的とした阪南大学国外短期研修で西安市文物保護考古所にお世話になった。この折り、同所副所長である程林泉氏より西安碑林博物館館長趙力光氏へ紹介を受け、8月9日より20日までの間、同博物館所蔵の碑誌および拓本の調査をおこなう機会を得た。碑林博物館所蔵碑誌の歴史的価値は改めていうまでもないが、その碑刻文字資料が多く公刊されているのに対し、碑誌を彫飾する文様に関してはごく限られた作品しか紹介されておらず、刊行されている拓本類も細部が判別し難い全体図か、逆に文様の一部分が収録されるだけというのがこれまでの実情である。そのため同館所蔵碑誌の装飾文様調査はかねての念願であった。

装飾文様の施された作例は建築・彫刻・絵画・工芸というほとんどの造形領域に存在し、その作例数が極めて多いということは装飾文様史研究における大きな利点である。しかし、その一方で、制作年代の明確な〈基準作例〉が乏しいこと、文様の一部分だけではなく文様全体の配置構成が分析できる〈全体資料〉と、単位文様を分析できる〈細部資料〉の両者を合わせた文様資料の蒐集が難しいこと、この2点が装飾文様史研究の大きな妨げとなっている<sup>1)</sup>。

碑林博物館の場合、石碑・墓誌・墓誌蓋に多種多様な装飾文様が施されていることだけで装飾文様資料の宝庫だといえるが、それらがいずれも紀年銘をもつ明確な〈基準作例〉であるこ

とがなにより研究価値の高い点である。またこれらの基準作例に対して、文様全体の布置構成を分析するために必要な、装飾空間全体がわかる拓本、さらに単位文様と複合文様を分析するために必要となる細部写真、この二種の資料を合わせて作成することができれば、中国文様史の研究のみならず、朝鮮・日本の文様作例を東アジア造形史のなかで位置づけるにおいても極めて有益な研究資料となるだろう。

調査の合間に何度か趙力光館長とお話しをする機会があったが、私が上記のようなことを述べると、同氏もこれに賛同され、話しは自ずと共同研究の方向へと進んだ。碑林博物館においても、それまで碑刻の研究が中心であったため、新たなテーマ設定の必要性があり、彫飾文様はそれになかった研究テーマであるとの判断であった。そこでまず文様研究の基礎資料となる『碑林博物館所蔵碑刻装飾文様集成』の刊行を提案したところ、同氏もまたこの考えに同意を示して下さった。

ただ同館の所蔵する碑石・墓志・墓志蓋の数は2000石以上といわれ、さらに現在も新たな収集品が増え続けているため、これらのどれほどの数に、どの程度の作柄の装飾文様が施されているかを把握するだけでも容易なことではない。同氏は自ら墓誌の収蔵庫を案内して下さい、新収墓誌の拓本なども見せて下さったが、私は収蔵庫に隙間なく並ぶ墓誌・墓誌蓋の列を見て、新たな作品に出会う興奮より、前途の遠きに眩暈がする思いだったことを記憶している。

同年11月、私は科学研究費補助金による研究調査のため同館を再訪し<sup>2)</sup>、趙力光館長と再度話し合うことができた。この時に上記『碑刻装飾文様集成』の編集方針として次の2点を提案した。まず第1点は、収録対象を唐代以前の作品に限定し、第1期として現在展示している碑誌、第2期を新取碑誌、第3期を未展示旧蔵碑誌より選別する。第2点は、1作例に対して、全体と部分の拓本写真、部分と細部の実物写真を載せ、これに文様配置図、単位文様および複合文様分析図、文様採取箇所図、描き起こし線画などの作成資料をつけることである。むろんこうした作業は容易ではなく、多くの時間と労力を必要とするが、従来刊行の図録類と一線を画し、単なる図録集ではなく、実際の文様研究において真に実用性のある資料集成とするためには、これら作業は不可欠なものだといえ

よう。

こうした提案に対して、趙力光館長も基本的に同意を示され、さらに共同研究を望まれたため、帰国後にその旨を大学に打診したところ、阪南大学東アジア歴史文化研究所においてこの共同研究を進めることになり、同年12月末に同研究所と西安碑林博物館は意向書を交し、2007年4月より正式に共同研究が開始されることとなった。そこで本稿では、この共同研究に先立って、西安碑林の沿革と碑林博物館の概要を述べ、第1期資料集成の収録対象となる碑林博物館展示碑石・墓誌・墓誌蓋について、その装飾文様の概況をまとめておく。

## II 西安碑林と西安碑林博物館

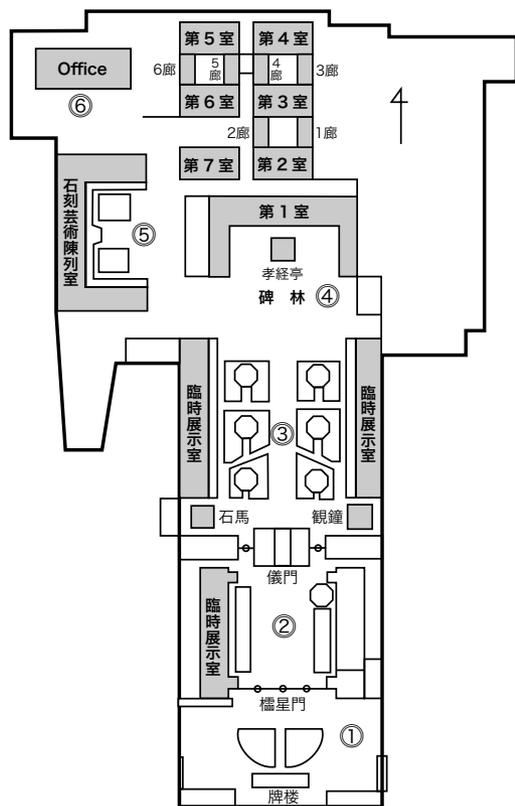
### 1. 西安碑林博物館概要

西安碑林博物館は城壁に囲まれた旧城内の南門（明德門）から城壁に沿って東に700㍍ほど行った三学街の端にある。西安市内観光で碑林を除外することはまずないであろうが、年間入館者数50万人はともかくとしても、展示室で終日調査をしていて、団体観光客が途絶えた時はほとんどなかったといってよい。同館の現有館蔵文物は約8000点とされているが、その中核をなすのは、漢代画像石、唐代陵墓石彫、仏像彫刻などの石刻芸術とともに、漢代より中華民国にいたるまでの碑刻約2500点である。

碑刻とは石面に刻んだ文章であるが、その内容はそのまま歴史研究の一次史料となるし、その文字の書体は歴代書法を示す一次史料となる。著名なところで例をあげれば、唐へのネストリウス派キリスト教（景教）伝来を記した「大秦景教流行中国碑」（781年）は歴史家の、顔真卿書の「顔氏家廟碑」（780年）は書道家の垂涎的のことができよう。これはほんの一例であって、館内に林立する多くの石碑の様はまさに「碑林」という言葉にふさわしい。

碑林博物館は南北に細長い敷地で総面積31900㎡、陳列面積4900㎡、現在は6つのエリアに区画される（図1）。南端の東門（西門

図1 西安碑林博物館館内図



は現在閉鎖中) から入館した第1エリアは孔廟区で、明万歴20年(1592)建立の木造牌楼「太和元気坊」が建つ。その南面の外壁には「孔廟」の2字が刻まれている。樞星門より儀門にいたる間の第2エリアには、西に臨時展示室、東にミュージアムショップと外賓接待室がある。儀門をくぐった第3エリアには、西側に大夏真興6年(424)の石馬、東側に唐景雲2年(711)の景龍観鐘が置かれた少亭があり、少亭それぞれの北側に臨時展示室が続く。この東西展示室の間に2列3基ずつ6基の碑亭が並んでいる(図2)。

これら碑亭の間を抜けると、ようやく博物館の中核となる第4エリア、石碑・墓誌・墓誌蓋などの碑刻1000点ほどが展示される碑林区にいたる。正面には「石台孝経」が安置される重層の碑亭があり、その上層には金文字で「碑

林」と横書きされた額が掲げられる(図3)。この碑亭の後方に凹字形の第1室が南面し、その後方には北に向かって第2~4室が、これらの西側に南に向かって第5~7室が並んでいる。

第1室には114石、228面、650252文字にもおよぶ「開成石経」を陳列する。この石経は『周易』『尚書』『詩経』『周礼』『儀礼』『礼記』『春秋左氏伝』『書秋公羊伝』『書秋穀梁伝』『孝経』『論語』『爾雅』など12部の経書を唐開成2年(837)に刻んだもので、「開成石経」とよばれ西安碑林の起りとなったものである。現在のものは清代に『孟子』が補充されたもので「十三経」といわれている。第2室には「大秦景教流行中国碑」「不空和尚碑」など唐代の主な名碑を、第3室には篆書・隸書・楷書・行書・草書など歴代の各書体を代表する石碑を陳

図2 碑林博物館第3エリア碑亭



図3 碑林正面石台孝経碑亭



図4 碑林第3室内部



図5 碑林第2廊



列する(図4)。第4・5室は宋・元・明・清代の石碑を陳列するが、4室には庭園や山水の精巧な石刻画が多く、5室は清代の記事碑が中心となる。第7室には清順治3年(1646)の全10巻、145石の「陝西本淳化閣帖」が陳列されるが、これは北宋淳化3年(992)に太宗勅命により宮中秘蔵の歴代書道名品を棗の木に彫った「淳化帖(秘閣帖)」を拓本より石刻したものである。

これら第1～7室は碑石の展示を主とするが、墓誌・墓誌蓋の陳列は展示室間をつなぐ渡り廊下でおこなわれている(図5)。すなわち第2～3室の間にある第1、第2廊、第3～4室の間にある第3、第4廊、第5～6室の間にある第5、第6廊であり、墓誌・墓誌蓋はそれらの壁面に埋め込まれるか、床の台上にガラスカバーをして置かれている。また第4・5室の南外壁、第6室の北外壁にも、墓誌・墓誌蓋の埋め込まれたものがある。壁面に埋め込まれた墓誌・墓誌蓋の多いことは、それらに対する関心が文字面にあり、装飾文様の施された側面にはなかったことをよく物語っている。

碑林第1室西側の第5エリアには石刻芸術陳列室がある。ここには陝西省に散在した多くの石刻を、漢代墓室画像石や唐代陵墓石獸などの陵墓石刻、仏像彫刻などの宗教石刻にわけ、その代表的なものを展示している。この石刻芸術陳列室の北側第6エリアは、館長室・研究室・図書資料室などのオフィスエリアで、地下には墓誌・墓誌蓋などの収蔵庫がある。

## 2. 西安碑林と碑林博物館の沿革

「西安碑林」は最初から現在の博物館の地にあったわけではなく、その変遷をたどるのは多少煩雑で、現在地に移るまでに2度、あるいは3度の移転があったとされる。このあたりの事情を『西安碑林史』を参考に簡単にまとめると次のようになる<sup>3)</sup>。

西安碑林の直接の発端となるのは現在碑林第1室に陳列されている「開成石経」である。これは唐の開成2年(837)に刻され、現在碑林

正面の碑亭内にある「石台孝経」とともに当時の国立大学である「国子監」の敷地に立てられたが、この国子監は皇城に近接した「務本坊」内、現在の博物館の南方で城壁の外にあたる場所にあった。

唐代末期に長安城が縮小され、いまの西安城の規模になると、この国子監は城外に取り残され、石経も野に放置されたままとなった。そこで開平3年(909)、石経は城内に運び入れられ、「尚書省の西隅」に移された。これが最初の移転で、これを機に他の碑石も移され碑林の基礎ができたといわれる。

2度目の移転はそれから180年近くを経た、北宋の元祐2年(1087)のことで、「府学の北」の地に移されたことが記録されている。碑林博物館に関する多くの解説は、この地を現在の碑林博物館の場所だと解して、西安碑林の起点を1087年のこととしているようである。ところが、北宋の府学は元豊3年(1080)に「府城の坤維(西南)」に、崇寧2年(1103)に「府城の東南隅」に移されているため、前者が2度目の移転先であり、3度目の移転先となる後者が現在の碑林の所在地であるという説もある。この場合、現在の西安碑林の起点は1103年のことになる。

両説いずれにせよ、西安碑林はその後900年以上にわたって存続し、その間、碑石の数を増やし続け、碑刻という文章によって過去の様々な歴史事象を具体的に語り伝えているわけである。西安碑林に収集された碑石の数は、13世紀後半に41種、17世紀前半に66種、19世紀末に256種となり、中華民国24年(1935)の改修時には486種、1227石に及んでいたといわれる。

その後の西安碑林は、陝西省歴史博物館(1944年)、西北歴史陳列館(1950年)、西北歴史博物館(1952年)と名を変え、1955年より陝西省博物館となって以後40年、収蔵品の幅を広げつつ近代的博物館へと発展するが、この間1961年には西安碑林が「全国重点文物保护单位」に指定されている。

そして1991年、陝西省博物館はその歴史陳列部門を「陝西歴史博物館」として独立させ、石刻部門を中心とした本体は1993年に現在の「西安碑林博物館」となり、石刻博物館としての性格と目的を明確にした。その後も同館は石刻の収集を続け、現館長趙力光氏の集計によると、1990年代中頃の館蔵品は、碑石435種、墓誌1069種、線刻画70種、経幢29種、画像石105種、造像448種、その他石刻274種の計2430種、3300余石に及んでいる<sup>4)</sup>。

### Ⅲ 西安碑林博物館所蔵装飾文様作品の研究状況

日本人研究者が碑林を訪れるのは清朝末期、すなわち明治末年の頃からで、明治39年(1906)より43年の間に、関野貞、足立喜六、桑原隲蔵が碑林の精密な平面図とともに碑石に関する記録を残している<sup>5)</sup>。この時期は中国側に記録が残されていない時期で、彼らの探訪記は当時の碑林の状況を知る貴重な資料である。昭和になってからは10年(1935)に結城令聞が訪碑記を、昭和45年(1970)に塚田康信が当時の碑林状況の調査結果と関野貞の記録を比較した報告をおこなっている<sup>6)</sup>。

以上の諸研究は碑林の沿革や現状を中心とした研究であり、碑石に関しては金石文としての資料価値や書法を論じるものであり、碑石に施された装飾文様に焦点をあてたものはない。ただ一部碑石の優れた装飾文様は当時より研究者の目を引き、関野貞が常盤大定と編纂した『支那佛教史蹟』に図版として紹介されている<sup>7)</sup>。

この図版に基づき西安碑林の装飾文様を最初に中国文様史の中に位置づけたのが長広敏雄で、昭和25年(1950)に「唐代の唐草文様」を発表している<sup>8)</sup>。長広敏雄は水野清一とともに昭和13～19年(1938～44)の間、雲岡石窟の調査をおこない、その報告書の中で石窟内の装飾文様を記載するとともに、昭和21年(1946)に「唐草文様の展開」を発表しているが、昭和25年の時点ではまだ西安碑林を実見

していないようである<sup>9)</sup>。

長広は先の「唐代の唐草文様」において、西安碑林より以下の6碑石の碑側装飾文様を取り上げている<sup>10)</sup>。

- ①龍朔3年(663)大徳因法師碑(『支那佛教史蹟』第1巻図版37・38)
- ②天寶2年(743)隆闡法師碑(同書図版49)
- ③開元4年(716)法蔵禪師塔銘(同書図版61)
- ④開元24年(736)大智禪師碑(同書図版41・42)
- ⑤長慶2年(822)国公功德銘碑(同書図版50・51)
- ⑥会昌1年(841)大達法師玄秘塔碑(同書図版45)

これらの作例を中国唐草文様の造形史に位置づけることを試みた長広は、「唐の唐草文研究に貴重な資料をあたえるのは西安碑林の多くの紀年銘ある石碑であるが、現在われわれはそれらの碑の文様拓本資料をわずかしか手にしていない。とにかく研究を促進する方向はこの辺にキイ・ポイントがあると思う。」<sup>11)</sup>と述べている。しかしその後半世紀以上を経た現在まで、長広が取り上げた以外の西安碑林の紀年作例が積極的に紹介されることも、詳細に造形分析されることもなかったというのが、わが国における文様史研究の現状だといえよう。

昭和40年(1965)、日中文化交流会の要請により陝西省博物館は碑林石刻80種を選び、全碑面にわたる精巧な拓本をとって日本での展覧会を開催したが、その中の一部が『西安碑林』として刊行されている<sup>12)</sup>。これに序文を寄せた郭沫若は「従来の人々は古代の文物に対しては、多くは文字書法に注目して、その彫飾造型を見のがしていた。これは一種の偏向である。思うに文字書法は上層の統治階級の手になったものだからして重視せられ、彫飾造型は職人の手に出たものだからとくに軽視されたのであろう。」と述べているが、昭和以後の日本における碑林研究も、書道関係者による書法の研究や、文献史家による文字史料の研究が中心であったことは確かである。

もっとも美術史研究において碑林碑石の彫飾が軽視されていたわけではなく、長広が指摘したように装飾文様の研究を促進するには、公刊されている拓本や写真資料では限界があったというのが実際のところであろう。『西安碑林』は276枚の拓本を収録するが、大版(51×35釐)であった上に、従来の碑面、墓誌面のみの拓本とは異なり、碑側や墓誌・墓誌蓋の4側面の拓本がともに収録される点において、編者自らが記したように画期的なものであった<sup>13)</sup>。現在碑林博物館に展示されている作品で同書に収録されている作品については表2・3にその図版番号を記載しておくが、同書の刊行以後、日本において類書は公刊されていない。

中国では1990年代になって碑側や墓誌・墓誌蓋側面の拓本を収録した図録が多く刊行されるようになり、作例の収集にはずいぶんと役立つようになったが<sup>14)</sup>、版型が小さいため図版の詳細がわからなかったり、文様の一部しか収録されなかったりと、やはり実際に文様分析をおこなうには不都合なことが多い状況が続いている。

1999年、碑林および陝西省内の精品石刻1770石(1884面)を収録した『西安碑林全集』全200巻が刊行された<sup>15)</sup>。この全集によって碑林博物館石刻文字史料のすべてが公にされたといつてよいが、石刻の彫飾に関しては限られたものしか収録されていない。碑誌に施された装飾文様の有無については、2006年に刊行された碑林博物館所蔵目録である『西安碑林博物館蔵碑刻総目提要』に注記されている<sup>16)</sup>。この中より唐代以前の碑誌(蓋を含む)に限定して装飾文様のあるものを数えると、表1のよう

表1 『西安碑林博物館蔵碑刻総目提要』収録碑誌中文様装飾の注記があるもの

種別	時代	頁	序号	作例数
碑石	隋代以前	1 - 3	1 - 18	2
	唐代	3 - 11	19 - 81	25
墓誌	隋代以前	57 - 84	1 - 312	19
	唐代	84 - 128	313 - 823	319
2005年度入蔵碑志	唐代	163 - 170	1 - 96	77
				442

に442石となる。

一方、実際に碑林内に置かれている碑石・墓誌・墓誌蓋に関しては、その展示作品一覧表や展示配置図が『西安碑林書法藝術』や『西安碑林史』などに載せられているが<sup>17)</sup>、現在の状況とは若干異なる部分がある。私が2006年9月に、唐代(一部北宋)までの碑誌に限って確認したところでは、表2・3のように碑石30石(内北宋が5石)、墓誌・墓誌蓋35石の計65石に装飾文様を認めることができた。

#### Ⅳ 碑林博物館展示碑石・墓誌・墓誌蓋の装飾文様

装飾文様の施された唐代以前の碑石は、入口碑亭内に置かれた「石台孝経」1石以外は、第2室に13石、第3室に16石陳列されている(図6)。展示室は中央南北に出入り口があるが、これをもって東(右側)西(左側)室に分けると、第2室では東室に5石、西室に7石ある。また第2室の東室には、南北東の内壁三面に碑誌が嵌め込まれており、このうち東面に碑石が1石ある。また東面、北面に1石ずつ墓誌蓋がある(図6・10では、室内の碑石と室外の墓誌は別々の通し番号をつけているので、この2石は第6室の北面外壁墓誌よりの続き番号として34、35とする)。第3室では東西両室の碑石8石ずつに装飾文様が施されている。

表2はこれら30石の基本データを所在位置順に一覧表としたもので、施文の場所により、碑石の左側面、右側面、碑面周縁部に分けている。「破損・文様不明箇所」は碑石の破損箇所および施文面の風化、摩滅による文様不明箇所を示す。「文様状態」は施された文様の状態を、完好・良好・判別可・やや判別可・判別不能の5段階で示す。「技法」では文様の彫出技法を、陽刻・線刻(陰刻)の2種に分ける。「鉄枠」とは碑石の倒壊を防ぐために碑石周縁に被せられた鉄枠の有無を示す(図7)。これが取り付けられている場合は、碑石の周縁部分が数センチほど隠されてしまうのと、側面に渡された横

図6 裝飾文様の施された碑石の配置図

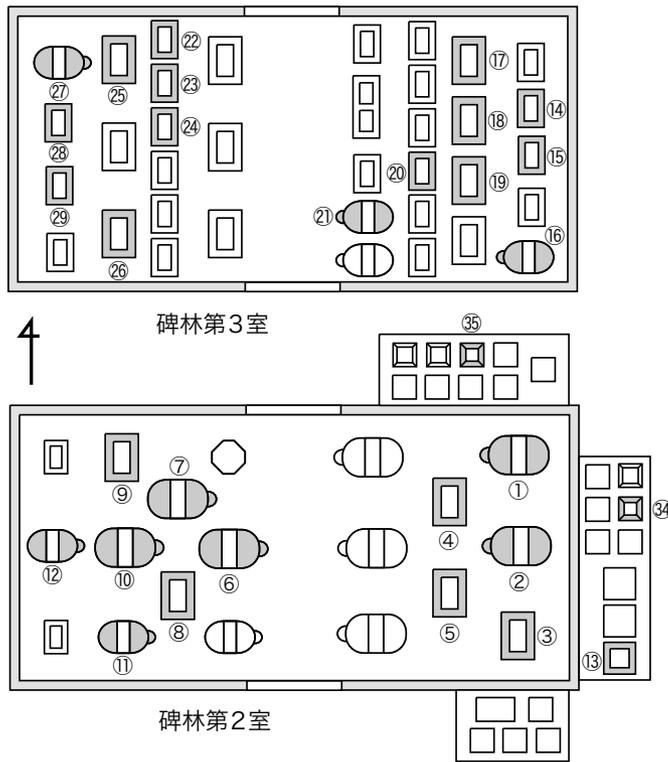


図7 碑石倒壊防止鉄枠



図8 動物系モチーフ⑤



図9 抽象化モチーフ⑥



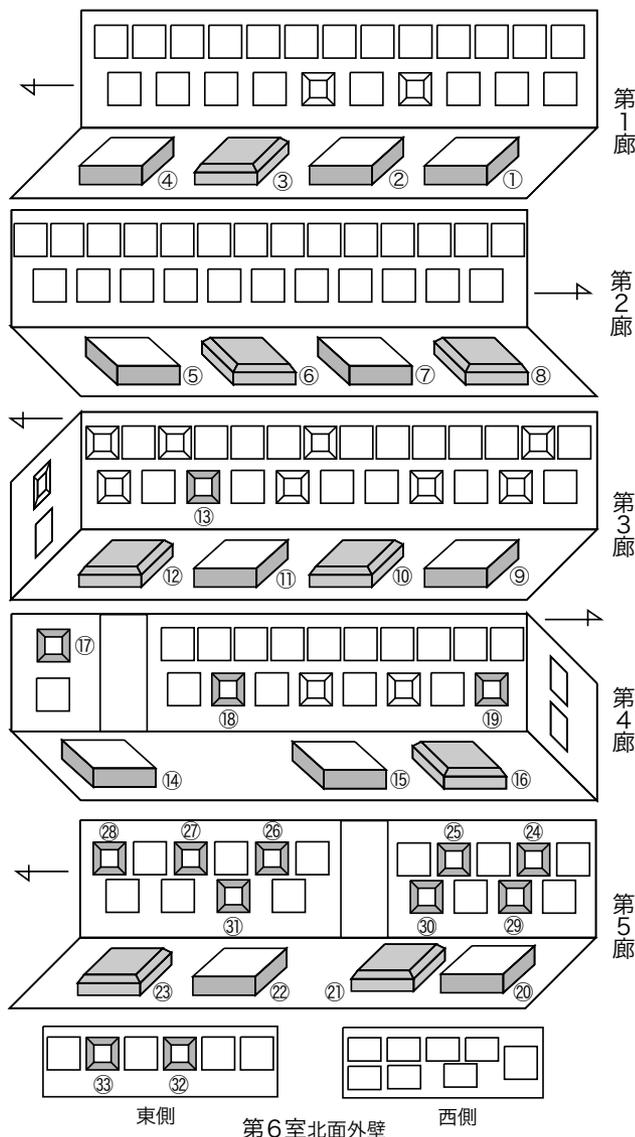
表2 装飾文様の施された碑林展示石碑一覧

展示室	番号	碑石作列名	王朝	年号	年	西暦	碑四面	破損・文様不明箇所	文様状態	技法	録持	主モチーフ	碑座	碑座文様	主モチーフ	技法	史料価値	保存状態	西安碑林	隋唐
第2室	1	隆福法師碑	唐	天宝	2	743	左側面 右側面		完好	陽刻	3	植物系	龜趺	良好	植物系	繚刻	A	A		46
	2	争座位書碣	唐	広徳	2	764	左側面 右側面	上半分不明 上方1/5不明	判別可	繚刻	2	植物系	龜趺	良好	植物系	繚刻	B	C		49
	3	興福寺殘碑	唐	開元	9	721	左側面 右側面	上部欠損 上部欠損	良好	陽刻	無	無	植物系	判別不能			A	A	69.71 69.70	41
	4	玄奘塔碑	唐	会昌	1	841	左側面 右側面	上部欠損	良好	陽刻	3	植物系	方形	良好	植物系		A	A		54
	5	三藏經教序碑	唐	咸亨	3	672	左側面 右側面		完好	陽刻	3	動物系	方形	良好	植物系		A	A		34
	6	通因法師碑	唐	龍朔	3	663	左側面 右側面		完好	陽刻	3	抽象化	龜趺	良好	人物		A	A		33
	7	梁守謙碑	唐	長慶	2	822	左側面 右側面		良好	陽刻	3	植物系	龜趺	良好	動物		A	A		52
	8	皇甫誕碑	唐	貞観	年間	627-649	左側面 右側面	文様なし 上方1/5不明	判別可	繚刻	3	抽象化	方形				A	B		24
	9	同州三藏經教序碑	唐	龍朔	3	663	左側面 右側面		完好	陽刻	4	植物系	方形	良好	人物		A	A		32
	10	大智禪師碑	唐	開元	24	736	左側面 右側面		完好	陽刻	3	植物系	龜趺	良好	動物		A	A	72.75 72.74	43
	11	鴻胥神道碑	唐	開成	2	837	左側面 右側面	全面不明	判別不能	繚刻	3	植物系	龜趺	良好	動物		C	C		53
	12	三藏記碑	唐	大暦	2	767	左側面 右側面		良好	陽刻	2	動物系	龜趺	良好	動物		A	C		50
	13	淨域寺法藏禪師塔銘	唐	開元	4	716	碑面周縁		完好	陽刻	無	無	植物系			A	A		40	
	14	惠聖禪師碑	唐	元和	1	806	左側面 右側面		完好	陽刻	2	植物系	方形	完好	植物系		A	A	103 103.104	51
	15	智永真草千字文碑	北宋	大観	3	1109	左側面 右側面	下方3/4不明 中央上部下方1/3不明	判別可	繚刻	3	植物系	方形	判別可	動物		C	C		
16	大観總作之碑	北宋	大観	2	1108	左右側面 碑面周縁	全面不明	判別不能	繚刻	3	植物系	龜趺	完好			C	C			
17	遺徳寺碑	唐	顕慶	3	658	左側面 右側面	下端一部欠損 下端一部欠損	完好	陽刻	2	抽象化	方形	完好			A	A		30	
18	郭氏家廟碑	唐	広徳	2	764	左側面 右側面	上方1/3不明 全面不明	やや判別可	繚刻	3	無	植物系	方形	やや判別可		C	C			
19	季愨碑	唐	貞観	23	649	左側面 右側面		完好	陽刻	2	抽象化	方形	完好	植物系		A	A			
20	孔子廟堂碑	唐	武徳	9	626	左側面 右側面	上方1/4欠損 上方1/4不明	判別可	繚刻	3	植物系	方形	判別可	動物系		A	B		14	
21	篆書千字序碑	北宋	乾徳	5	967	左側面 右側面		完好	陽刻	3	動物系	龜趺	完好	動物系		A	A			
22	杜順和尚行記碑	唐	大中	6	852	碑面周縁 左側面 右側面	周縁部欠損	判別可	繚刻	無	無	植物系	完好	動物系		B	B		55	

23	比丘尼法琬禪師碑	唐	景龍	3	709	左側面 右側面		良好	陽刻	無	植物系	方形	B	B	39
24	于孝顯碑	唐	貞觀	14	640	左側面 右側面	右側部欠損 右側部欠損	判別可 判別可	陽刻 陽刻	無 無	抽象化 抽象化	方形	B	B	28
25	靈化寺大德智詵法師碑	唐	貞觀	13	639	左側面 右側面	全面不明	判別不能	陽刻	無	抽象化	方形	A	C	27
26	李美簡家廟碑	唐	元和	15	820	左側面 右側面	情報1/2不明	判別可	陽刻	無	植物系	方形	B	C	
27	興慶池契宴詩	北宋	慶曆	2	1042	左右側面 碑面周縁	全面不明	判別不能	無	無		龜趺	C	C	
28	折繼神道碑	北宋	嘉祐	2	1057	左側面 右側面	上端部欠損	完好	陽刻	無	植物系	方形	A	A	
29	德應侯碑	北宋	元豐	7	1084	碑面周縁 左右側面	全面不明	完好	陽刻	無	植物系	方形	B	B	
30	石台孝經	唐	天寶	4	745	碑面周縁 墓壇4周		良好	陽刻	無		方形	A	A	47

※表中「西安碑林」は西川寧『西安碑林』(講談社1966年)、「隋唐」は張鴻鴻修編著『隋唐石刻芸術』(三秦出版社1998年)の図版番号を示す。

図10 裝飾文様の施された墓誌・墓誌蓋の配置図



枠によって文様面が分断されてしまう。表の数値は横枠によって分けられた面数を表す。

「主モチーフ」は文様細部を除いた基本文様のモチーフを、動物系・抽象化・植物系の3種に分ける。これは碑側の波状連続文様を極めて大雑把に分類したもので、まず植物系と非植物系に大別し、非植物系連続文のなかに龍頭などが彫られたものを動物系(図8)、見られないものを抽象化文様(図9)と分類したもので、あくまで今後の研究上の便宜的なものである。抽象化文様とは虜龍文などの動物系曲線文様が抽象化されたものを想定している。「碑座」は基壇の形式を亀趺と方形で示す。「史料価値」とは碑石の史料価値ではなく、装飾文様のみを対象としたもので、そのモチーフや造形性が文様の造形展開においてどの程度の重要度を持つかをA～Cの3段階で判断した。これもあくまで今後の研究における指針という程度のものである。「保存状態」は該当の文様の保存状況をA～Cの3段階で示したものである。

墓誌・墓誌蓋を陳列する廊下は6廊あるが、唐代以前のは第1廊より第5廊までに展示されている。装飾文様の施された墓誌・墓誌蓋33石の配置は図10に示すが、第1廊、第2廊が台上の4石ずつ、第3廊が台上4石、壁面1石、第4廊が台上3石、壁面3石、第5廊が台上4石、壁面8石となる。また第6室の北面外壁には出入口を挟んで東西の外壁に墓誌が埋め込まれているが、この東側の墓誌蓋2石にも装飾文様が見られる。壁面に埋め込まれた墓誌・墓誌蓋は当然ながら側面を見ることはできない。廊下の台上に置かれた墓誌・墓誌蓋にはガラスケースが被せられているが、周囲を360度回ることができるので、上面、四周側面すべてを見ることは可能である。もっともガラスケースは固定されたまま長年を経ているので、内側面の汚れとともに、墓誌にたまった埃などで思うように観察することのできるものは少ない。

表3は上記35石の基本データを所在位置順に一覧表としたものである。「蓋型」とは墓誌

蓋上面の空間区分形式をⅠ～Ⅷの8種類に分類したもので、その形式概略図は図11に示しておく。装飾文様については主要なモチーフ10種を項目とし、上面、殺面、側面、四方のいずれかといった施文の場所や位置は省略し、その有無のみを示している。動物系・抽象化・植物系モチーフは上述の判断基準に従い、地文として地間充填に用いられる細かなC字形、半C字形、S字形曲線などは雲文系として分類しておく。「史料価値」「保存状態」などの項目は、上記の碑石文様一覧表と同様である。参考図版では、「西安碑林」が『西安碑林』、「隋唐墓誌」が『隋唐五代墓誌匯編 陝西卷』の1・2巻、「北朝」が『北朝石刻芸術』、「隋唐」が『隋唐石刻芸術』、「唐代」が『唐代墓誌紋装選編』を示す<sup>18)</sup>。

以上、西安碑林博物館に展示されている碑石・墓誌・墓誌蓋の装飾文様について、その現状と概要を略記したが、各碑誌に施された個別文様の詳細については、順次別稿をなしていくことにする。

図11 墓誌蓋形式略図

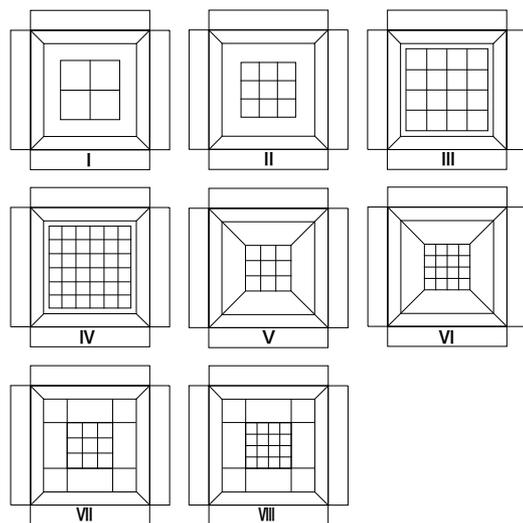


表3 裝飾文様の施された碑林展示墓誌・墓誌蓋一覧

廊下	番号	墓志作例名	王朝	年号	年	西暦	蓋型	四神	動物	十二支	鬼神	人物	雲氣系	動物系	抽象化	植物系	山岳	主要モチーフ		史料	保存	状態	参考図版番号	
																		価値	状態				西安碑林	隋唐墓誌
1廊	1	元暉墓志	北魏	神龜	2	519		○	○											A	A		120,122-125	北朝69
	2	元天穆墓志	北魏	神龜	2	519														A	A		149	北朝79
	3	荀景墓志蓋	北魏	永安	2	529	V	○	○		○									A	A		135,138-141	北朝76
	4	爾朱紹墓志	北魏	永安	2	529														A	A		131	北朝78
2廊	5	侯剛墓志	北魏	孝昌	2	526	VIII				○									A	A			北朝73
	6	侯剛墓志蓋	北魏	孝昌	2	526	VIII													A	A		130	北朝73
	7	爾朱勳墓志	北魏	永安	2	529					○									A	A		143	北朝70
	8	爾朱勳墓志蓋	北魏	永安	2	529	V	○	○			○								A	A		142,145-148	北朝70
3廊	9	張濟墓志	隋	大興	12	616														A	B			隋唐13
	10	張濟墓志蓋	隋	大興	12	616	II													A	B			隋唐13
	11	段威墓志	隋	開皇	15	595	IV			○										C	B			1-2
	12	段威墓志蓋	隋	開皇	15	595	IV													C	B			1-2
4廊	13	范安貴墓志蓋	隋	大興	11	615	III													B	C			隋唐11
	14	大唐薛氏墓志	唐	景雲	1	710														A	B			唐代33
	15	張佖墓志	唐	元和	13	818														A	B			唐代94-95
	16	張佖墓志蓋	唐	元和	13	818	VII													A	B		261	唐代92-93
5廊	17	唐安王墓志蓋	唐	開成	5	840	VII													C	C			隋唐12
	18	明雲騰墓志蓋	隋	大興	11	615	I													C	B			隋唐10
	19	張壽墓志蓋	隋	大興	11	615	V			○										B	B			
	20	唐張士則墓志	唐	天寶	7	748														C	C			
6室	21	唐張士則墓志蓋	唐	天寶	7	748	VI													A	C			
	22	唐張去逸墓志	唐	天寶	7	748														B	A			唐代68-70
	23	唐張去逸墓志蓋	唐	天寶	7	748	I			○										A	B			唐代64-67
	24	唐尉遲公主墓志蓋	唐	咸通	8	867	VII													A	B			
	25	太原郡王府君墓志蓋	唐	貞觀	1	785	VII													C	C			2-114
	26	唐張伯倫墓志蓋	唐	貞觀	7	633	VII													B	B			
	27	唐張伯倫墓志	唐	太和	7	833	II													B	B			唐代99-100
	28	唐裴氏小娘子太墓志蓋	唐	大中	4	850	II													C	C			唐代112-113
	29	唐盧立言墓志蓋	唐	天寶	3	744	VI													A	C			唐代49-52
	30	唐独孤开遠墓志蓋	唐	貞元	16	642	VI													B	B			唐代2-6
第6室	31	唐楊子邁墓志蓋	唐	咸通	5	864	V													C	C			
	32	唐韋瑱墓志蓋	唐	開元	6	718	V													A	C		224	1-96
	33	魏國大夫人裴境墓志蓋	唐	景龍	3	709	V													A	B			1-89
	34	程修己墓志蓋	唐	咸通	4	863	V													C	C			
內壁	35	王珣墓志蓋	燕	聖武	2	757	V													B	B			1-148

(表中の参考図版出典書籍名は本文注14に記す)

## 注

- 1) 山本謙治「装飾文様史の課題」笠井昌昭編『文化史学の挑戦』思文閣出版、2005年、52-70ページ、参照。
- 2) 平成18～19年度科学研究費補助金基盤研究(c)「玉虫厨子透彫り文様にいたる東アジア動植物モチーフ融合文様形成過程の研究」(課題番号18520109)。調査期間2006年10月31日～11月7日。
- 3) 路遠『西安碑林史』西安出版社、1998年。
- 4) 趙力光「西安碑林歴史述略」高峽主編『西安碑林全集』総巻冊、広東経済出版社・深圳海天出版社、1999年。
- 5) 関野貞「西安府文廟と碑林における古碑」『書道全集』8巻所収、平凡社、1930年。足立喜六『長安史蹟の研究』東洋文庫、1933年。桑原隲蔵『考史遊記』1942年、『桑原隲蔵全集』第5巻所収、岩波書店、1987年。
- 6) 結城令聞「西安碑林訪碑記」『書苑』第1巻第7号、三省堂、1937年。塚田康信『西安碑林の研究』同刊行会、1983年。
- 7) 関野貞・常盤大定『支那佛教史蹟』全12巻、佛教史蹟研究会、1925～1928年。
- 8) 長広敏雄「唐代の唐草文様」『仏教芸術』8号、1950年。
- 9) 水野清一・長広敏雄『雲岡石窟』全33巻、京都大学人文科学研究所雲岡刊行会刊、1952～1975年。長広敏雄『大同石佛藝術論』高桐書院、1946年。
- 10) 現在、これら6碑石はすべて碑林博物館第2室に展示されている。また①は「大徳道因法師碑」の誤りであり、⑤は「梁守謙碑」の名称で陳列されている。
- 11) 長広敏雄「唐代の唐草文様」『仏教芸術』8号、1950年、98ページ。
- 12) 西川寧『西安碑林』講談社、1966年。
- 13) 同上書、2ページ。
- 14) 西北歴史博物館編『古代装飾花紋選集』陝西人民出版社、1953年。吳鋼主編『隋唐五代墓誌滙編 陝西卷』1～4冊、天津古籍出版社、1991年。陝西歴史博物館編『唐代墓誌紋装選編』陝西人民美術出版社、1992年。陝西歴史博物館編『北朝石刻芸術』陝西人民美術出版社、1993年。張鴻修編著『隋唐石刻芸術』三秦出版社、1998年。
- 15) 高峽主編『西安碑林全集』全200巻、広東経済出版社・深圳海天出版社、1999年。
- 16) 陳忠凱等編『西安碑林博物館藏碑刻総目提要』綏装書局、2006年。
- 17) 李域铮等編『西安碑林書法藝術』陝西人民美術出版社、1997年。路遠『西安碑林史』西安出版社、1998年。
- 18) 注14参照。表3の参考図版「西安碑林」※249については、西川寧『西安碑林』では「張去奢墓誌蓋」の図版として掲載されているが、これは「張去逸墓誌蓋」の誤りである。

## 〔付記〕

今回の西安碑林博物館における調査では、館長趙力光氏に多くの便宜を図って戴いた。ここに謹んで感謝の意を表しておきたい。また同館外事秘書賈梅女史および本学国際コミュニケーション学部陳力教授には交渉面において様々な御協力を得た。両氏にも記して謝意を表す。

(2007年1月10日受付)